



必要な遠回り

君島恒星

目次

一.....	1
二.....	3
三.....	4
四.....	6
五.....	9
六.....	10
七.....	13

相模湾が、潮の香りを車内に運んで来た。

路面を蹴るタイヤの走行音が、気持ちを支えている。

耐えられるだろうか？

大パノラマの海模様も、一時的な効果でしかなかった。

東京から国道一三五号線に出て伊東方面に下っていくと、少しずつ僕たちは旅行気分を味わいだったが、伊東が近づくにつれ妻の玲子から笑顔が消えていった。随分と我慢をして、楽しそうにしている姿を演じていたのかもしれない。

「我慢しなくてもいいよ…」

と言ってやりたかったが、そのまま自宅に戻ることにになりかねないので、気持ちを抑えた。

昨日までの梅雨空が、嘘のように晴れ上がったのが、せめてもの救いだった。

道の駅、伊東マリンタウンが僕たちを迎えるが、昼時だからだろうか、駐車場は満車に近い。

「明日、寄りましょう。マリンロードを歩いてみたい！」

と、玲子は車の窓を開けて言った。マリンロードは伊東マリンタウンに併設されている海の遊歩道らしい。ネットで見たことがあった。

この三年間は、賑やかな所には行っていない。

お互いに沈黙を守りながら、伊東市内に入って行った。

三年前にも予約した日本旅館に車と荷物を置かせてもらい、伊東市内のお目当ての食事処へ足を運ぶ。当日、漁港で獲れた地魚を調理してくれるお店だ。胃を刺激したからか、玲子の気持ちも明るく弾みだしたようだ。

「東海館を見に行きましょう。歴史的にも価値ある建物だから！」

玲子は店から出ると迷わず、東海館の方角に歩き出した。今食べた金目鯛の煮つけ定食の余韻を楽しみながらの散歩になった。

「ちょっとだけ、遠回り…ね！」

お世話になる旅館には、遠回りになるが、急ぐ時間ではなかった。

玲子は東海館が近づくと、伊東大川を挟んだ「松川遊歩道」を歩き出した。

東海館を川越しに見ようということだろう。

玲子の特技とでもいうのだろうか？ 初めて行く旅行先でも迷ったことがない。というのも、行く前に旅先の資料を、頭に叩き込むように読み漁ってしまうのだ。もちろん、観光案内に載っていない地元密着観光地には対応していない。僕は負けまいとネット情報を漁る。その情報が曖昧だと、玲子は僕を攻めて、印刷物の安心感を論じるのだ。

いつも負けている。

そんな感じの繰り返し。

でも、この三年間、情報誌は見えていない。見られる状態ではなかったはずだ。今の記憶は三年前のものなのだろう。でも、僕は敵対心など持たずに、その記憶に従うことにした。

松川遊歩道を歩くと、川音をBGMに東海館の全ぼうを見ることができる。柳並木でもあるので、結構、粋な散歩コースだ。

シロサギが川石に立ち、川面を眺めている。水面下に顔を入れたかと思うと、くちばしには小魚が挟まっていた。飲み込むと、また水面に視線を戻した。彼らに満腹感はあるのだろうか？

東海館の隣に建っている建物は、ケイズハウス伊東温泉という。古い旅館を改修して宿泊施設にしている。コストパフォーマンスがいいので、外国人のバックパッカーや古き旅館愛好者の宿泊施設らしい。

鳩のモニュメントと柳越しに見る、東海館とケイズハウス伊東温泉は哀愁が漂っていた。伊東市指定文化財でもあり、歴史を感じることができる

伊東温泉に行こうと言い出したのは、玲子の方からだった。

三年前に、ひとり娘の麻衣子と初めての夏休みに行くはずだった伊東温泉…早割予約で割引予約もしていたのに、伊東温泉に行くことなく、麻衣子は亡くなった。

麻衣子は、とっても楽しみにしていた。

キャンセルをした後、旅行とか伊東温泉の単語を使うことはなくなった。

あれから三年たった今になって、玲子から伊東温泉に行きたい…と言いだした。

玲子の選択に、僕は従うしかなかった。

何故、伊東温泉なのか？

何故…

玲子に深く聞くことは出来ない。それは、玲子の選択を揺るがすことになったらいけない…という不安感があるからだ。

とにかく、自分たちの気持ちの整理をする意味でも、行く事に賛成した方がいいと、自分ひとりで納得した。

このままでは、一生、伊東には行けなくなってしまう。

三

麻衣子が亡くなったのは、幼稚園の年少さんに入った年の五月の話だ。ちょうど、幼稚園の雰囲気慣れてきた頃だった。もちろん、本人も、僕たち家族も生活リズムが出来てきた頃だった。

毎日、幼稚園が終わると、送迎バスで帰る園児たち以外は、幼稚園から、自宅近くの集合場所まで、先生達が歩いて引率してきてくれる。

その日も、集合場所にお母さんたちが、子供たちの帰りを待ちながら世間話をしていた。時間になっても、いつもの騒がしい小さな集団は来なかったという。その代わりに救急車の音…パトカーのサイレンの音が、住宅街を脅かした。

幼稚園の引率の列に車が突っ込んだ。

飲酒運転。

麻衣子は病院に搬送されたが、2日後に意識が戻ることもなく、亡くなった。

何故？

何故、麻衣子だったのか？

亡くなったのは年少の二人…麻衣子と手をつないでいた優くんという男の子だった。

麻衣子は怖い思いをしたのだろうか？

車が迫ってきたのを、見たのだろうか？

それは、とんでもない恐怖感だと思う。特に運転席の男がヘラヘラしていたら…

犯人は、飲酒運転だった。それも、2度目で無免許だったという。その情報を知ったのは、テレビの騒がしいバラエティー番組からだった。

そんな人間を、僕らと同じ世界に存在させておいたのがいけない。

存在価値などない。

殺してやりたかった。

でも、そんな事など出来るわけではない。

怪我を負っただけの子の親は、ホッとしたことだろう。片足を切断した子の親は、これからの事を考えて途方にくれているかもしれない。亡くなった方が幸せだと思われるかもしれない。

でも、その時、僕たちは麻衣子の事しか考えられなかった。必至だった。周りの事など考えられなかった。自分たちの事しか考えられなかった。

いや、自分たちの事も、考えることが出来なかったのかもしれない。言われるままに、病院の先生や警察の方の話を聞いている振りをして、いろいろな書類にサインをした。そして病院にずっと座って、いままでの記憶と想像が頭の中を渦巻いていた。

気が付けば、納骨が終わっていた。

お墓を持たない僕たちは、お墓も購入した。そのために、宗派も改宗した。

親は孫を遠い実家の墓に入れるのは、不憫だったのだろう。近くの郊外の墓地の購入金額を補助してくれた。

親戚や友人からは、慰めの言葉をいただいたが、その全ては理解できない言葉の羅列だった。

「おふたりとも、若いから大丈夫よ！」

「また産めばいいじゃない！」

「時間が解決してくれる！」

大声で叫びたかった。

大声で泣きたかった。

でも、僕と玲子は沈黙を守った。

四

東海館は昭和九年に建築され、増築を重ねた木造三階建ての建物だ。旅館は廃業して、温泉施設をやりながら、昭和初期の見学ができるようになっていた。

入館料を払い、玄関でスリッパに履き替えて昭和初期の空間に入った。

玄関は当時の風格がある温泉情緒が漂っていた。当時の番頭さんが仕事をしている姿を、容易に想像することができる。

彫刻も素晴らしい。中庭には鶴亀を表した大石で池庭が作られていた。各部屋の部屋前の明かりシェードは、職人に競わせたとかで、各階各部屋それぞれに細かな細工がしてあった。

びっくりしたのは、障子の棧が曲線を用いて図柄を作っている事だった。

「職人の成せる業ね」

いろいろなことに感心している僕に対して、玲子は一言で片づけた。

三階には大広間がある。

大広間の入り口には、脱いだスリッパがなかったので、誰もいない事がわかる。僕たちふたりは、古の空間に浸った。

昔の伊東芸者の古めかしい写真が飾ってあった。毎夜、宴会が行われ、酒に酔い、笑い、楽しむ。そして時には泣き、まるで人生の縮図が繰り広げられているように想像してしまう。ここに集った人たちの表情まで感じられるような気がした。

大広間を後にしようとした時、入り口に脱いでいたスリッパを見てびっくりした。

僕たちの二足の他に、もう一足あった。

僕たちが大広間で、想像を膨らませていた時に誰かが入ってきたのだろうか？

いいや、誰もいなかった。

現に今、大広間には僕たち以外誰もいない。もしも誰かが入ってきたとしても、その人はどこに消えたのか？ ただの悪戯とは思えなかった。

僕たちは目を見合わせた。そしてお互い、嫌な想像を巡らせた。

「こんにちは」

窓際の縁側に座っている女性に驚いた。

「玲子！ そのスリッパの人！」

妻の玲子の姿は、何故か、見あたらない。

大広間に和服の女性が扇子を揺らしていた。

「あら、わたしが見えるの？ 声をかけてみるものですね」

目と耳を疑った。

幻？ 幽霊？ 妖怪？

いや違う。

もっと身近な切ない人を感じた。

「うれしい。わたしに見とれているの？」

黙って見つめているのも失礼になると思い、言葉を探した。

「いや、なんか似ていて…」

「誰に？ あ！ その、お嬢ちゃんに？」

「えっ！」

僕の足の蔭に隠れるように彼女を見つめているのは、三年前に亡くなった娘の麻衣子だった。

「麻衣子！」

麻衣子は、幼稚園の紺の制服を着て、僕の足を抱きしめながら、上を向いて笑った。

そのエクボは、まぎれもなく、娘のものだった。

幼稚園の入園前には、紺の制服が部屋にかかっていた。毎日のようにその新しい制服を目にしていたけど、事故の後は血にまみれて、病院で鉄を入れてしまった。

今、麻衣子は綺麗な新しい制服に身をまとっている。

僕はしゃがんで、麻衣子の目線に近づいた。

変なことに気が付いた。麻衣子には声がなかった。音を感じなかった。

「麻衣子！ 会いたかったよ。ずっと会いたかった！」

麻衣子は、口を動かして何かを話しているが、理解できなかった。そんな僕を見つめて、一回、コクリと首で合図をした。

抱きしめようとしたが、両手は麻衣子に触れることはなかった。

自然と、落胆した表情になったのだろう。麻衣子は、笑顔を振りまいてくれた。生きている時も、この笑顔に沢山の元気をもらっていた。

和服の女性は麻衣子に言う。

「お嬢ちゃん…麻衣子ちゃんっていうの？ お姉さんに似ているわ。目のあたりかしら？」

「ケーキ好きでしょう？ お姉さんも好きなのよ」

麻衣子は、目を輝かせた。

「でも、食べられない…わたしたちは…ケーキの記憶は鮮明だけどね…」

和服の女性と麻衣子を感じながら、深呼吸をした。

「僕は迷い込んだのでしょうか？」

「迷い込んだ？ そうね。そうかもしれない。この中途半端な世界に…」

「中途半端な世界？ あっちの世界ではないの？」

「あっち？ 違う！ 違う！ あっちに行けば、ここで会うことはできないわ…まあ、あっちとかこっちとか、訳が分からなくなってしまうね」

言われたように、僕は訳が分からなくなっていた。

夢なのか？

「麻衣子ちゃん、一緒に遊びましょうか？」

和服の女性は麻衣子に手を差し出した。

麻衣子はコクリと首を縦にした。

五

「何、ポーっとしているの？」

玲子の声で我に返った。

引き戻された感じだった。

麻衣子も和服の女性も、そこにはいなかった。古にもっとも近い大広間が広がっていた。

今の出来事を考えていた。

玲子に話してみようか？ 迷っていると、急に玲子は怒りだした。

「せっかく古い建物を見に来たのだから、ゆっくり見学させてよ！ おどかさないで！」

僕にではなく、スリッパの人に言っているのだ。

麻衣子はどう説明する？

本当にあったことなのだろうか？

僕の記憶の中の出来事なのだろうか？

麻衣子と女性との再会は、時間軸がずれているように感じた。

説明などしきれない。

白日夢…そう思うのが自然なのだろうか。

六

三階の上には、急な階段が誘う望楼があった。遠くを見渡せる、展望台のような部屋だ。

窓が開いていて開放感があった。伊東港を見ることができる。建物が乱立していない昭和の時代は、今よりもいい眺めだったと思うが、現在の眺めも捨てたものじゃない。いつでも、いいものはいい。

潮風を感じることもできた。

パン…パン…

何かを叩く音…

紙風船で遊ぶ麻衣子がいた。

一緒にさっきの和服の女性もいる。

色鮮やかな紙風船は、空を舞う。それを操る…いや、紙風船に操られている麻衣子がいた。楽しそうに大声で笑いながら…声が聞こえている。自分が慣れてきたのだろうか？

この不思議な世界に…

「いち！ にい！ さん！ あっ！」

紙風船は麻衣子の小さな手を待たずに、畳に落ちた。

「あら、残念」

「もう一回！ もう一回！」

元気そうな、弾ける笑い声の麻衣子がいた。

「それじゃ、もう一度ね」

麻衣子に話しかけてみた。

「麻衣子！」

麻衣子は驚いた顔をして僕の顔を見つめた。

「パパ！」

麻衣子はキラキラした目で僕を見つめている。

「パパ！ いつもいたよ。いつも話かけていたのに、パパとママは気がついてくれなかったの？」

一瞬の間を感じて、彼女が言う。

「パパとママはずっと麻衣子ちゃんの事を考えていたのよ。それは見ていたでしょ？」

麻衣子はうなずいた。

「うん、よく泣いていた…ママ…」

「そう…それを見て、麻衣子ちゃんも悲しかったね」

「うん」

「怖い事を言うと思われるかもしれないけど、お姉さんのように、ここに未練を残してはダメよ。ラッキーだと思わなくちゃ…パパやママたちよりも先に進めるのだからね」

「お姉ちゃんは？」

「わたしは、訳があってここを離れることが出来ないのよ…」

「ふーん」

僕はふたりの会話に割り込んだ。

「どんな訳があるのですか？ あと…麻衣子が先に進めるって、どういうことですか？」

彼女は困ったような顔をした。

「訳は聞かないでください。聞いたらパパさんもわたしと同じ運命の渦に巻き込まれるかもしれませんよ」

彼女の瞳の中に吸い込まれてしまうほどの、無限感を感じた。

「ごめんなさい…今の質問は却下です」

思わず、目が泳いでしまった。

「怖がらせちゃいましたか？ それは、失礼しました。そういうキャラじゃないのですが…」

彼女が何者なのか、興味が湧いてきた。

「でも、そんなに想ってくれて有難うございます。わたしは普通の女です。名前は凜子と申します。もうひとつの質問も、お答えするには、時間が必要です。それに、体験しないと信じられない事ばかりですからね」

凜子さんはちょっと悲しそうな表情を見せた。

「パパさん、こんな時に何ですが、考えてみてくださいね。麻衣子さんは幼くして亡くなりました。考え方によっては、この世の汚れを知らないまま、いい思い出を一杯抱えて行けるのです。さっき麻衣子ちゃんに聞きましたが、小さな頃からいろいろな所に連れて行ってもらったそうですね。あっちには、思い出は沢山持っていけるけど、玩具やお金は持っていけませんからね」

「もっともっと、思い出を重ねたかった…それが本音ですけど…」

凜子さんは、ジッと僕の顔を覗き込んで不思議そうな顔をした。

「あら？ もしかしたら大島くん？」

その凜子さんの言い方に、小学生時代を思い出した。

当時、教育実習生として数週間僕たちの学級に溶け込んだ川上凜子先生の面影がマッチした。

「川上先生？」

僕は、小学生四年の時に初恋をした。それが川上先生だった。白いブラウスが印象的だったのを覚えている。

当時の担任がタヌキのような親父先生だったので、川上先生の登場は素晴らしく華麗な存在だった。クラスの男子に限らず女子までもが、川上先生を慕った。教室で川上先生の周りにはいつも誰かが笑顔を見せていた。

目立たない僕の事を憶えてくれていたのか？

その川上先生が今ここに？

何故？

もう、亡くなっているのか？

でも、ここにいる凜子さんは、もっと昔の存在に思えてしょうがなかった。

「わたしは何度も生まれ変わっているの…信じろというのが無理かもしれないけど…新しい所が、大島くんが知っている川上凜子ね。そして、何故かここに戻ってしまう。不思議よね…。そういえば、教育実習の時にお別れ会をしてくれましたよね？ みんなで合唱したり、寸劇をしたり、手品をしたり…大島くんたちは面白かったな…オペラの真似事だったっけ？」

「カルミナブラーナです。今でいうエアーパーラ？ CDに合わせて大げさな指揮をして、口パクで歌っているふりをしましたよね。あの時は、学級委員の鈴木と仲が悪かったので、単独で仲間を集めて数時間で仕上げました。あ…別に手を抜いたわけではないけど…お仕着せの出し物を押す鈴木に反抗したかったのが、本音です」

「対抗勢力がないと進歩はないわ。あのオペラは流れから外れていたの逆で逆が目立ってたわ」

「素朴な疑問ですが、なんで凜子さんは僕の前に現れたのですか？」

「わたしは、神ではないし、何にもわかっていないわ。たまたまの偶然…それとも必然なのかしら…わたしにもわからない」

麻衣子がひとり、紙風船を追いかけていた。

紙風船が畳に落ちると、麻衣子は僕の方に走ってきた。

「パパに言うておくことがあるの…」

「何だい…改まって」

「麻衣子…怖くも痛くもなかったよ。優くんと手をつないで、お話ししていたら急に暗くなったの…次の時には病院でパパとママが泣いていたの…わたし、上から見ていたの…」

「あの時、怖くなかった？」

「うん」

せめてもの救いだった。

七

「帰りも、松川遊歩道から帰りましょう」

と言う玲子の言葉に従い、伊東大川越しの東海館の望楼を仰ぎ見ると、凜子さんが僕たちに手を振っていた。

麻衣子は僕の少し前を歩いている。麻衣子も見上げて大声を出した。

「お姉ちゃん！」

玲子は、麻衣子の事が全然不思議ではなさそうに、麻衣子の後ろ姿を微笑んで見つめていた。

そして、大きく凜子さんに手を振っていた。

僕は、今の状況が上手く理解できなかった。玲子も僕と同じように不思議な体験をしていたのだろうか？

川風が頬を通り抜けた。

「あなた、宿についてから、食事の時に話そうと思っていたのだけど、今…話をするわ」

玲子は真剣な眼差しを僕に向けた。

「え、何だろう…」

と言いながらも心の中では、自分の生活態度を思い返していた。自分に落ち度はないか？ 話の内容は何なのか？ 見当がつかないからだ…不安感が支配した。

「パパ！ そんな心配するような顔をしないでよ。悪い話ではないから。もう一人子供を授かったわ。今、3ヶ月…」

「え！ …本当に！ でも、大丈夫なのか？」

あの時玲子は、もう子供なんていらないと言っていたからだ。

「何が？ 麻衣子の事？ 自分でも不安よ。だから今日、伊東に来たのよ。麻衣子の思い出を忘れることは出来ないし、自分を試す意味でも…」

「それは、何となくわかっていた…玲子は強いと思っているから」

「そして、この数時間のうちに、とてつもない体験をしたの…あなたは信じないと思うけど…わたしを後押ししてくれた」

玲子は満足そうな表情…そして母親の表情をみせた。

「やっぱり、そうだったのだ。僕も凄い体験をした。東海館の凜子さんだろ？」

「そうそう、凜子さん！」

玲子は、ビックリした顔をしていた。でも、お互いの不思議な体験にふたりの接点はなかった。違う空間に同じ凜子さんと逢ったのだろうか？

麻衣子が僕たちを見ていた。不安そうな眼差しが切なくなった。

玲子はしゃがんで、麻衣子に言った。

「麻衣子に弟か妹が出来るのよ。パパとママは麻衣子がいなくなってから、麻衣子の想い出の中で生きてきたけど、それは、凜子お姉さんの言うように、パパとママにとって、良いことではないのかもしれないわ。それはわかってくれるわよね。麻衣子ならわかってくれるはず…」

麻衣子は、不安そうな表情を笑顔に変えた。

僕と玲子を交互に見つめ、笑顔で頭をコクリと動かした。

そのまま、麻衣子の身体は薄くなってきた。笑顔のまま消え始めた。

「見えなくなった…消えちゃった…」

玲子は悲しそうに、麻衣子が立っていた場所を、涙を流しながらいつまでも見つめていた。

「私たち、三年もかかっちゃったのね。引きずりすぎかしらね」

「そんなことはないと思う。必要な時間…必要な遠回りだったよ。麻衣子はそれを教えるために、逢いに来てくれたのだと思う。不思議だけど…ところで、凜子さんと何があったの？」

「あなたも不思議な世界に入ったの？」

「ああ…さっきまで体験していた。もう、夢心地になっているのだけれど…」

「そうか…わたしの話は、宿に着くまでに話さきれないと思うから、覚悟してよ」

「わかった。徹夜覚悟だな」

「伊東に来て正解だったわ。色々な意味で…」

「僕もそう思う」

麻衣子の消えた向こう側にある、夕日に照らされた、淡いコントラストの東海館を見つめていた。

玲子の体験話にワクワクしていた。そして僕らが前向きになっているのを感じた。

明日も晴れることだろう。

必要な遠回り

著 君島恒星

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
